第３章　体操運動におけるチェコ系社会とドイツ系社会の「分化」
―― 「他者」を「他者」と認識するとき ――

福田 宏

はじめに

1862 年 4 月 18 日、プラハの歴史家ギンデリ（Antonín Gindely, 1829-1892）は、深刻化するドイツ人とチェコ人の対立について以下のように書いている[1]。

> ... 我々［ドイツ人とチェコ人］の間の対立はますますひどくなっている。要するに両者を媒介する性格を維持しているような会合とか機構とかいったものがすでに存在しないのだ。もし体操をしたいと思うならば、ドイツかまたはチェコの（böhmisch）体操協会のどちらかに所属しなければならない。チェコの社交クラブ［ベセダ］があるかと思えば、ドイツのカジノもある。またドイツ系の歴史協会があるかと思えばチェコのも...。要するに、もし息を吸おうとするならば、ドイツの空気かチェコの空気のどちらを選ぶかを説明しなければならない、そんな時代がここにやってきているのだ。

この記述は、ドイツ人とチェコ人の「和解不可能性（Unversöhnlichkeit）」を示す例として歴史家によってしばしば引用されているようである。しかしながら、19 世紀末においてみられたような深刻なネイション[2]対立が、1860 年代初頭の段階ですでに生じていたと果たして考えて良いのだろうか。本章においては、1860 年代の実相を明らかにするために体操協会に着目し、結社レベルでのネイション関係について探っていくことにしたい。これが本章における第一の目的である。なお、体操協会は合唱運動と並んで、最も早期にドイツ系とチェコ系に分裂した結社の一つ

---

[1] ギンデリからフルメツキー（Chlumecký）に宛てて書かれた書簡。なお、この書簡は Kamil Krofta, *Antonín Gindely* (Praha, 1916), p.229 においてまず引用され、それが Richard Georg Plaschka, *Von Palacký bis Pekař: Geschichtswissenschaft und Nationalbewußtsein bei den Tschechen* (Graz/ Köln, 1955), pp.41-42、次いで Emil Brix, “Mentalität ist gut: Die Teilung der Prager Universität 1882,” *Österreichische Osthefte* 30:3 (1988), pp.374-375 において言及されている。ここで用いたのは、ブリクスの論文で紹介されているテキストである。

[2] B. アンダーソンをはじめとする「近代論」の論者が指摘しているように、ネイションを想像するという行為は近代社会への移行期において発生した現象である（例えば、B. アンダーソン［白石隆、白石さや訳］『増補 想像の共同体 ― ナショナリズムの起源と流行』 NTT 出版、1997 年、などを参照）。「後発」のチェコ・ネイションにしても、そうした「近代性」を有するという点では同じであった。だが、本章において示唆されるように、1860 年代のチェコ社会におけるネイション対立と 19 世紀末に見られたネイション対立は位相を異にするものであった。つまり、ネイション自体は「近代的共同体」として想像されながらも、実際に表象されるネイションは多義性を持った存在なのである。本稿においては、概念のこうした「多義性」を強調するために、nation/ Nation/ národ を「ネイション」とカタカナで表記することにしたい。

であり[3]、両者の関係を探るうえで有効な手がかりになるものと考えられよう。
それに対し、第二の課題となるのは、体操運動史それ自体に潜む「語り」を抽出するという点である。特に、チェコ社会において最大の結社へと成長した体操団体のソコルについては、当事者を中心として様々な文献が著されているが、それらは多かれ少なかれ、書かれた時代の状況を反映していると言えるだろう。ここでは、主としてソコル史の資料に依拠しながらも、その記述がどのような「拘束」を受けているのかという点を常に意識して考察を進めていくことにしたい。そして、1860 年代の状況が、歴史記述の中でどのように解釈されていたかについては、本章の最終節において述べたいと思う。

なお、大雑把な区分ではあるが、ソコル史の記述については、それが書かれた時期によって以下の四つの段階に分けることができよう（なお、[ ] 内の数字は文末に付した文献一覧の文献番号である)。

(1) ソコルが大衆的な体操団体として本格的に勢力を伸ばし始めた 1880 年代から第一次世界大戦までの時期。1883 年に編纂されたプラハ・ソコル 20 周年史[21]は関係者向けという色彩が強いが、20 世紀初頭には、シャイネル[24]など、チェコ社会に向けてソコル運動の意義を強調しようとする記述が現れるようになった。
(2) チェコスロヴァキア第一共和国が成立した 1918 年から共産主義体制に移行する 1948 年までの時期。祭典には必ず大統領が臨席し、祭典のプログラムに軍隊による軍事演習などが組み込まれるなど、ソコルは国家体制と密接に結びついた存在となるが、ソコル史の記述は依然として運動の当事者によって担われていた。代表的なものとしてはソコルの通史を書いたヤンダーセク、ペリカーン[11]やフィカル[4]、英文でソコルの存在を国際的に知らしめようとしたヤンダーセク[10]、ソコル創設者の伝記を書いたティルショヴァー[29,30]等が挙げられよう。
(3) 1989 年までの共産主義時代。この時代においては、体育学を専攻する研究者によって歴史の記述が行われるようになったが、その主たる対象となったのは労働者体操運動であった。ソコルについては「ブルジョア的反動」のために当初の理念から逸脱した存在と見なされるようになったのである。代表的なものとしてはムハ[15]や『ソコルの 110 年』[25]等が挙げられる。なお、この時期には、アメリカ合衆国のノルテが、ソコルとナショナリズムの関係に着目した研究を開始し、その成果を[16][17][18]等として発表している[4]。
(4) 1989 年以降のポスト共産主義時代。ソコルに焦点を当てた研究が出始めたが、旧体制の頃の反動もあって、ソコル運動を無批判に捉える傾向が少なからず存在する。なお、体育史研究者によって出されたヴァイツ[31]に加えて、結社研究の観点から体操運動に焦点を当

[3] Gary B. Cohen, *The Politics of Ethnic Survival: Germans in Prague 1861-1914* (Princeton University Press, 1981), p.63.
[4] なお、1968 年に出版されたイェジェクの参考文献目録[12]は有用である。

てたイェリーネク[12]や祭典研究の観点から初期ソコルの重要性を指摘したノヴォトニー[19]が出されるなど、体育学以外からの参入が生じている。

ここでは、主に(2)の戦間期に書かれたソコル史を情報源として活用していくが、必要に応じて、他の時期に著された文献やドイツ系体操運動についての資料も活用していくことにしたい[5]。

１．体操運動における「分化」過程

チェコ社会において本格的な結社活動が開始されたのは、ハプスブルク君主国に擬似立憲体制が導入された 1860 年以降のことである。この時期、様々な結社が誕生するが、そのほとんどはドイツ系とチェコ系に「分化」したり、最初から別々に設立されたりしたのであった[6]。体操運動についてみれば、その「分化」のプロセスは、大雑把に言って次のような三つの段階に分けて説明されることが多い。

(1) 1840 年代から 50 年代にかけての体操運動の萌芽期。チェコ系とドイツ系の体操家たちが一緒に活動していたとされる時期。
(2) 1861 年末におけるチェコ系とドイツ系の分裂から 1870 年代末にかけての時期。ただし、この時期においては、両者の関係はそれほど悪いものではなく、相互の交流も行われていたとされる。
(3) 1880 年代以降の個別的発展の時期。両者の関係が敵対的になったとされる時期。

まず、体操運動の萌芽期について見ていくことにしよう[7]。プラハにおける最初の体操機関と言えるのは、病気や障害のある子供のリハビリを目的として 1840 年に設立された治療施設であった。その後、この機関を引き継いだシュミット（Ferdinand Schmidt）が、対象を子供だけでなく大人にも拡大し、体操の中味もより一般的なものへと変更したのであった。他方、1853 年に設立されたマリペトル（Jan Malypetr, 1815-1899）の機関ではチェコ語による指導が初めて導入され、初の「チェコ的体操施設」となったが、いずれにしても、ドイツ体操の基礎となった『ドイツの体

[5] 日本においては、功刀[14]や福田[5][6][7]といった研究がある。
[6] cf. Marek Lašťovka, et al., *Pražské spolky: soupis pražských spolků na základě úředních evidencí z let 1895-1990* (Praha: Scriptorium, 1998).
[7] この時期に体操施設に通っていたチェコ系の人物として、歴史家の F. L. パラツキー（1798-1876）、言語学者のシャファジーク（Pavel Josef Šafařík, 1795-1861）、生理学者のプルキニェ（Jan Evangelista Purkyně, 1787-1869）、教育学者のアメルリング（Karel Slavoj Amerling, 1807-1884）、医師の E. グレーグル（Eduard Grégr, 1827-1907）とジャーナリストの J. グレーグル兄弟（Julius Grégr, 1831-1896）、後にソコル創設者の一人となるティルシュ（Miroslav Tyrš, 1832-1884）といった名前が挙げられている。

操術』が範とされていたという[8]。単純化するならば、この「チェコ的」なマリペトルの施設が後のソコルの母体となり、シュミットによって運営されていた機関がドイツ系体操団体の母体となったと言えるが、実際には事態はもっと「複雑」であったようである。後にチェコ系の体操家となった人物の中にもシュミットの施設に参加していた者がいたし、その逆も存在したからである。また、そもそも両方の機関において活動している者もいたのであった。当時の文脈においては、チェコ系かドイツ系かという相違は、まだそれ程問題とはなっておらず、1861 年に新たな体操団体を創設する計画が持ち上がったときにも、特に議論されることもなく、双方のネイションを含む「ウトラキスト的（utrakvistický）[9]」組織の設立が決定されたのだという[10]。

ところが、この年の秋、事業家でありクレディットアンシュタルト（信用銀行）のプラハ支店長であったパトロン役のゾイター卿（Eduard Seutter Edle von Lötzen）が、設立資金を提供する代わりにプラハ男子体操協会（Pragermänner Turnverein）というドイツ語の名称とドイツ語での訓練を要求したことから対立が発生する[11]。結局、ティルシュやグレーグル兄弟は、1862 年 2 月にチェコ系独自の組織「プラハ体操協会（Tělocvičná jednota Pražská）」を設立したのであった。なお、「ソコル（Sokol，鷹を意味する）」という名称は、南スラヴ人の解放闘争における英雄を意味する言葉であり、トンネル（Emanuel Tonner、1829-1900）の提案によって名付けられたと考えられるが[12]、当初は当局への配慮から正式名称としては登録されていない。一方、ドイツ系の団体は「プラハ・ドイツ体操協会（Deutscher Turnverein in Prag）」という名称で 1862 年 1 月に設立されている。

しかしながら、60 年代から 70 年代にかけては、ソコルとプラハ・ドイツ体操協会の関係は必ずしも敵対的なものではなかったという[13]。例えば、1864 年に行われた後者の旗の聖別式には、「民族衣装」のチャマラを着たソコルのメンバー16 人が参加していたし、1870 年においても、ソコルはプラハ・ドイツ体操協会のメンバーを公開体操に招待していたのである。

---

[8] Friedrich L. Jahn, Ernst Eiselen, *Die deutsche Turnkunst zur Einrichtung der Turnplätze* (Berlin, 1816). その他にもスイスのシュピース(Adolph Spiess, 1810-1858)によって著された *Die Lehre der Turnkunst* (Basel, 1840-1846), 4 vols. なども教材として用いられていた。

[9] この言葉は、両形色論、すなわちパンと葡萄酒の二つの形による聖体拝領を意味するキリスト教の用語であり、フス派の穏健派を指し示すものであったが、19 世紀半ばにおいては、チェコ系とドイツ系の双方を含むという意味で用いられていたようである。

[10] 1912 年に出版されたプラハ・ドイツ体操協会の 50 年史においては、60 年代の始めまでは「種族(Volksstämme)」の違いに関わりなく体操が行われており、そもそも、体操のドイツ的性格を疑うものは誰もいなかった、と書かれている。また、マリペトルの「チェコ的」な体操にしても「ドイツという芽から発育開花した」ものにすぎないと評価されたのであった。Rychnovsky [23], pp. 8-9.

[11] Roček [22], p. 15; Jandásek & Pelikán [11], pp. 6-7.

[12] *Památník* [21], p. 46.

[13] 1880 年代に書かれた回想記では、当時のドイツ系体操協会とソコルの関係は「騎士的な（chevalereskní）」ものであり、両者の「交流」が行われていたとされている。*Památník* [21], p. 234; Rychnovsky [23], pp. 21-22. なお、1862 年 5 月 11 日、ソコルがプラハ郊外のザーヴィストに遠足を行い、行く先々で「歓迎」されたのに対し、プラハ・ドイツ体操協会も、その一週間後の 18 日、同じ場所を目的地とする遠足を行ったのであった。ところが、ドイツ人の場合には、帰り道でチェコ人による「投石の嵐」に遭ったのだという。なお、毎年行われていたプラハ・ドイツ体操協会によるプラハ近郊への遠足は、ネイション対立の悪化のため、1886 年以降、中止されたのであった。Rychnovsky [23], p. 23; *Památník* [21], pp. 224-225.

この時期においてみられたドイツ系体操家との「交流」は、ソコル運動史においては、後続世代の読者に一種の「驚き」を与えるものとして記述されている。だが、1880 年代以降においては、こうした「交流」は影を潜め、チェコ系とドイツ系の「敵対関係」が常態化したのだという。ただし、1880 年代以降に関するソコル史においては、ドイツ系体操運動との関係よりも、体操運動の成熟やチェコ的体操の体系化といった問題に重心が置かれているように思われる。1882 年に初めて行われたソコルの第一回祭典、会員数の大幅な増加、体育館を中心とする日常的活動の充実など、チェコ・ネイションにおける身体文化の発展ぶりが強調されているのである。もちろん、その言説には、チェコ体操がドイツ体操に匹敵し、ある意味ではそれを凌駕するだけの力を獲得したという自負心が見え隠れしていると言えるだろう。

２．フュグネルの「チェコ化」— 創設者の「覚醒」

体操団体がネイション毎に「分化」していく中で、当事者のアイデンティティーはどのように変化していったと見なされているのだろうか。ここでは、ソコルの創設者として筆頭に挙げられるフュグネル（Jindřich Fügner, 1822-1864）とティルシュの内、特にフュグネルに焦点を当てて、その語られ方についてみていくことにしよう。

彼は、プラハで成功した織物業者の息子として 1822 年に生まれ、ドイツ語を話す両親の下で育ったという。ギムナジウムを卒業後、商業の実地経験を積むためにトリエステ（現イタリア）に滞在し、そこで祖国の統一と独立を求める青年イタリア党とガリバルディの熱狂的な支持者となる。それもあってか、プラハに戻ってからはハプスブルク帝国の保守的な体制にますます不満を持つようになったとされている。また、唯の不仲であったのか、それともその「経済的エゴイズム」を嫌ったのかは定かではないが、同業者であり、従兄弟でもあるリービヒ（Liebig）を「人間であることを忘れた魔物」と呼び、その影響下から逃れるために、家業の織物業から保険業界へと転身を図ったのであった[14]。

フュグネルがチェコ人として意識的に活動するようになったのは 1859 年頃であったようである。一人娘レナータの家庭教師をしていた風刺作家のノヴォトニー（Josef Novotný）がチェコ系の政治犯として数回、投獄されたこと、そして、フュグネル自身、ノヴォトニーを通してチェコ系サークルとの交友関係を持つようになったことから、フュグネルは徐々にチェコ人としての意識を持つようになったと説明されている。彼は、妻と娘共々ドイツ人や「ハプスブルクの連中(habsburáky)」との交遊を制限し、家族の目につく場所にはドイツ語ではなくチェコ語の本を置くようにしたという。また、ハインリヒ（Heinrich）というドイツ風のファーストネームをイン

[14] フュグネルが義兄弟ヘルフェルト（Joseph Alexander von Helfert, 1820-1910）に宛てた 1855 年 2 月 27 日付の書簡。Feyl [3], pp.552,559; Tyršová [29], vol.1, p.33; Nolte [17], p.58.

ジフ（Jindřich）というチェコ風の名前に変え、写真撮影をする場合には必ずソコルのユニフォームか或いはチャマラを着るようになったのであった。

とはいえ、すでに40代にさしかかろうとしていたフュグネルにとっては、チェコ語をマスターすることは容易ではなかったようである。彼はドイツ語で書いた娘への手紙の中で「バカなお父さんはチェコ語で書くのは上手くないんだ」と嘆いて見せたこともあった[15]。しかしながら、当時のチェコ系エリートにはフュグネルのようにチェコ語が苦手な者が多く、チェコ語ができないということは特に「障害」とはならなかったようである[16]。

さて、そのフュグネルとソコルとの関係であるが、彼自身は熱心な体操家ではなく、時折フェンシングをたしなむ程度であったという。彼がソコルの初代会長に選ばれたのも、ティルシュやグレーグル兄弟の推薦によるものであり、彼自身の意思によるものではなかったらしい[17]。だが、チェコ語が不得手であったにもかかわらず、ソコル・メンバーの多数を占めていた仕立屋、指物師、肉屋、毛皮加工業者といった手工業者と親しく接するようになり、彼らと「君・お前」で呼び合う関係になったとされている[18]。ただし、遠足の目的地などで見知らぬ人と接する場合には、彼は目立たずに行動するように心がけ、チェコ語での演説についてもティルシュをはじめとする他の指導者たちに任せていたのであった[19]。

しかしながら、フュグネルをチェコ系陣営に向かわせたのは一体何だったのだろうか。娘のレナータによれば、それは、彼の持っている自由主義と民主主義の精神なのであった[20]。彼にとっての自由主義とは暴政、王朝、教会に対する戦いであり、そこから彼の青年イタリアへの共感、アイルランド運動への共感、ハプスブルクに対する反感が生まれたのだという。寝室にカントと

---

[15] Tyršová [29], vol.1, p.73. 幼少時のレナータが「お父さんの子供の時はまだドイツ人だったの？」と尋ねた時、父親は以下のように答えたという。「全然。ドイツ人ではなかったよ。プラハ人、ドイツ語をしゃべるプラハ人だったんだよ。あそこにたくさん本があるだろう？　あれは昔買ったものだけど、その中にはチェコ史の絵があるんだよ。私はそこからチェコの歴史を学んだし、印刷されたチェコ語の単語を一語一語判読していったんだ。単語の意味は、食事で使うチェコ語の蓄えとドイツ語の単語の助けを借りながら理解したんだよ。」 *Ibid.*, vol.1, p.19.

[16] ロチェクによれば、フュグネルはドイツ人としての顔を完全に捨てたわけではなかった。ビジネスの世界では彼は依然としてハインリヒの名前で活動し、ボヘミア芸術協会といったドイツ系組織のメンバーであり続けたようである。Roček [22], p.30, n.49.

[17] 「ソコル旗の母」とも呼ばれた作家のスヴェトラー（Karolina Světlá, 1830-1899）は、フュグネルが会長に選出されたと聞いたとき、それが自分が昔から知っているハインリヒ・フュグネルと同一人物とは思えなかったという。なぜなら、彼女の知る限り、フュグネルの一家はチェコ語を一語たりとも話せないからであった。*Za praporem* [32], p.16; *Památník* [21], pp.62-65.

[18] Tyršová [29], vol.2, pp.27-28. 1862年3月27日に行われた交流会（přátelská schůzka）において、フュグネルは、会員同士が「君・お前」で呼び合うことを提案し、了承されている。 Dvořáková [2], p.46. なお、ソコル・メンバーは、ドイツ系体操団体と同様、実際に体操を行う会員と寄付会員や創設会員といった実際には体操を行わない会員から構成されていた。一般的には、後者の非体操会員には社会の上層部に位置する人間が多く、体操会員には手工業者や自営業者などの「小市民層」や労働者が多数含まれていたと言える。*Památník* [21], pp.215-221; Dolanský [1], p.522; *Sto deset let* [25], pp.16-17; Cohen, *The Politics of Ethnic Survival*, pp.193f.; Erika Kruppa, *Das Vereinswesen der Prager Vorstadt Smichow 1850-1875* (München: R. Oldenbourg, 1992), pp.190-191.

[19] Tyršová [29], vol.2, p.82.

[20] Tyršová [29], vol.1, p.87; vol.2, p.116.

ワシントン、そしてガリバルディの肖像画を飾り、反体制ジャーナリストのハヴリーチェク(Karel Havlíček Borovský, 1821-1856) に親近感を示していたというのもその表れであったらしい。そして、民主主義的な立場から貴族の特権に嫌悪感を示し、「小さき人々 (malé lidé)」を尊重していたという。こうした点から、フュグネルはチェコ人としての人生を選択したとされているのである。

３．チェコ的体操の探究 ― 身体文化の創出

次に、チェコ人にとっての体操の位置づけについて見ていくことにしよう。ソコル創設者の一人であり、チェコ体操の体系を創出した人物としてティルシュを挙げることができるが、そもそも彼はなぜナショナルな体操が必要だと感じたのであろうか。この点について、後にソコルの「福音」と評されるようになった彼の著作『我々の課題・方向・目的』(1871 年) から読みとっていくことにしよう。

ティルシュはこの小論において、人間を含むすべての創造物の歴史は「存在を巡る絶え間ない闘争」であると規定し、その中で、能力がなく劣性のものは戦いに敗北し、死に絶えるのだと主張している。社会ダーウィニズム的な発想がここには表れている[21]。彼は、人類の発展の単位となるのはネイションであるとし、社会の中では強いネイションだけが生き残り、弱いネイションは滅びる運命にあると主張した。「衰退するか、それとも成熟するか、すなわちオール・オア・ナッシングかのどちらかしかない」のである。特に、小さなネイションの場合は、少ない数の中で発展に必要な力を確保し、その健全なる発展を図らねばならない為、その分、大きなネイションよりも努力しなければならない。こうした「厳しい状況」の中でチェコ人が存在に値するネイションとして生きていくために、ソコルが必要とされたのである[22]。

それでは、チェコ人はどのような体操をすべきなのか。ティルシュは、1868 年に著した『オリンピアの祭典』において、チェコ人が参照すべきモデルとしてギリシア人の体操を挙げ、特に、彼らの団結を内外に誇示する場として機能していたオリンピアの祭典を高く評価している[23]。ティルシュによれば、ギリシア人たちは自らの力を誇示するためではなく、祖国 (vlast) を守り祝

---

[21] ただし、ティルシュがダーウィンの著作を読んでいたかどうかは定かではない。Dr. Julius Sachs という人物がティルシュにダーウィンについての情報を与えたとされているが、ティルシュの著作においてダーウィンについての言及はなされていないからである。Havlíček [9], pp.49-50; Tyršová [30], vol.1, p.36. なお、ドイツ語圏において「社会ダーウィニズム (Sozialdarwinismus)」という言葉が初めて使われたのは 1906 年のことであった。この言葉は主として R. ホーフスタターの『アメリカの社会進化思想』(原著は 1944 年にアメリカ合衆国で出版) において使われたものが歴史家の間に広まったのであり、少なくとも 19 世紀半ばの言葉ではなかったと言える。Alfred Kelly, *The Descent of Darwin: The Popularization of Darwinism in Germany, 1860-1914* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1981), p.101; p.157, n.1.

[22] Tyrš [27], pp.131-133.

[23] Tyrš [26], p.38; Jandásek [10], p.74; Tyršová [30], pp.75-77; Olivová [20], pp.505-507.

福するために古代オリンピックに参加したのであった。勝利の証として月桂冠やオリーヴの葉を獲得することそれ自体が重要なのではなかった。彼らにとって大事であったのは、競技での勝利によって祖国の強さが証明されることだったのだという。チェコ人が学ぶべきモデルとされたのは、こうしたギリシア人の「愛国主義」と「利他主義」なのであった。

ソコル史の記述においては、ドイツ体操が中世の騎士を参照したのに対し、チェコ体操は古代ギリシアの身体文化を参照したと説明されることが多い。その行間においては、ドイツ体操の「射程の短さ」に対するチェコ体操の「奥の深さ」と「豊かさ」が強調されているのである。しかしながら、ドイツにおいて「体操の父」と評されたヤーン（Friedrich Ludwig Jahn, 1788-1852）にしても、「ドイツ国民に次ぐ」と題する講演を行ったフィヒテにしても、古代ギリシアを参照していたという点はここで指摘しておくべきであろう。フィヒテとヤーンは、ドイツ人が純粋な言語を有する「始原民族(Urvolk)」であり、ギリシア人の文明を継承するに値する存在だと主張したのであった[24]。このように、ギリシア人を参照すべきモデルとして取り上げ、自らのネイションがそれを継承する唯一無二の存在であると規定するレトリックは、チェコ・ナショナリズムだけに見られたわけではなかったのである。

しかしながら、古代ギリシアを模倣するというだけでは、チェコ体操を構築するには不充分であった。ティルシュは、体操における「チェコ性」を提示するために、ナショナルな体操の体系を創りあげていったのである。その成果が 1873 年に出版された『体操の基礎』であった[25]。ただし、彼は体操における「チェコ的なるもの」を産みだしたわけではない。彼が成し遂げたのは、「チェコ的な体操」（と思われるもの）に近代的な体操体系という衣をかぶせ、それを表現する手段としてのチェコ語の専門用語を創りだしたことであった。このことによって初めて、チェコ体操はドイツ体操に匹敵する「近代性」と「独自性」を有するものとして現出しえたのである[26]。

おわりに

チェコにおける一般的な体操運動史に従うとするならば、1860 年代初頭におけるドイツ系体操協会とチェコ系体操協会の関係は、それほど悪くはなかったということになろう。だが、その評

---

[24] Dieter Düding, *Organisierter gesellschaftlicher Nationalismus in Deutschland (1808-1847)：Bedeutung und Funktion der Turner- und Sängervereine für die deutsche Nationalbewegung* (München, 1984), pp. 24-28. その他にも、森政稔「ナショナリズムと政治理論」 山脇直司他編『ネイションの軌跡』（ライブラリ相関社会科学 7)、新世社、2001 年、327-330 頁、を参照。

[25] Tyrš [27]. 本書において、体操は四つのカテゴリーに分類されている。(1) 器具無しの体操。自由運動、走り、跳躍、行進。(2) 器具有りの体操。鞍馬、水平木棒（今日の鉄棒)、平行棒、ダンベルなどを使う体操。(3) 集団体操。(4) 格闘技、レスリング、ボクシング、フェンシングなど複数で行われる体操。なお、本書の序文においては、ヤーンがプロシアに亡命したボヘミア兄弟団の末裔であると書かれている。*Ibid.*, p. 6.

[26] この点については、篠原琢 「チェコの 19 世紀をめぐって ― 自己表象の歴史学」『東欧史研究』 19 号、1997 年、65-73 頁、および、*Povědomí tradice v novodobé české kultuře* (Praha: Národní galerie, 1988) 等を参照。

価の背景には、単線的なチェコ人の「覚醒」過程という「ナショナル・ヒストリー」の「語り」が存在しているように思われる。この時代を説明するにあたっては、両者の対立がそれほど深刻なものではなかったという点や、ドイツ人やチェコ人といったアイデンティティーが曖昧であったという点が強調されるものの、それらは、チェコ・ネイションが成熟していくうえでの過渡的現象として理解されるのである。しかしながら、1860 年代初頭において認識されていたドイツ系とチェコ系の差異は、曖昧であったのではなく、後の時代に認識されるようになった差異と位相を異にするものであったのではなかろうか。

ここでフュグネルの娘レナータの説明をもう一度見てみることにしよう。ドイツ系であったはずのフュグネルがチェコ系へと転じた理由は、彼女の説明によれば、自由主義と民主主義の精神であったという。とすれば、自由主義や民主主義を信奉していたからチェコ語が用いられる社会に転じたというのではなく、自由主義や民主主義といった近代的概念とネイションが同一視されていたと考えたほうが当時の実相に近いのではないのだろうか。すなわち、当時の社会においては、自由主義者や民主主義者になることとチェコ人になることが同義のものとして捉えられていたように思われるのである。実際、この時代の文献においては、近代性や市民社会の概念と符合する語彙が「チェコ的なるもの」と同義で扱われ、封建性や反動を示す言葉が「ドイツ的なるもの」と同一視されているのである。その点は体操についても同じであった。フュグネルは、単にチェコ的な体操を行うことがチェコ人の育成につながると考えていたわけではない。彼にとっての体操とは、「奴隷根性」から自らを解放するための手段であり、自立した人間になるための術なのであった。人々は、まさにその体操を行うことによって近代的な市民（＝チェコ人）へと転じることができると考えられていたのである[27]。

また、フュグネルが元々ドイツ人の家庭で育ったという記述にも注意が必要であろう。フュグネルがドイツ語を主とする家庭環境の中で育ったのは事実かもしれないが、ドイツ人というアイデンティティーを持っていたかどうかは定かではないからである。また、彼が自覚的にチェコ人としての人生を選択していたとしても、それがドイツ人からチェコ人への転換と認識されたわけではないだろう。「ドイツ系の家庭に育ったにもかかわらず、チェコ人として覚醒した」という表現は、あくまで 1880 年代以降の言説空間において可能になったはずだからである。その点では、使用言語の問題はあくまで慎重に扱う必要があろう。

しかしながら、当時の社会において志向されていたものが市民社会的なものであったとするならば、それは何故ナショナルな側面を有していたのであろうか。当時の運動が「純粋に」近代的な社会を求めるものであったならば、体操協会のような結社がチェコ系とドイツ系に分裂する必然性はなかったはずである。現段階においては、その理由を明確に説明することはできないが、多少の推論を提示することによって本章の結びに代えることとしよう。

---

[27] Feyl [3], pp.571-572. 義兄弟ヘルフェルト宛ての書簡（1862 年 4 月 20 日付）において、フュグネルは、発育不良（verkümmert）の職人を鍛え、彼らに自覚（Bewusstseyn）を持たせることが「奴隷根性」からの解放につながると述べている。

体操協会におけるメンバーの社会的出自を見ていくと、ドイツ系・チェコ系のいずれも手工業者や自営業者といった「小市民層」、および労働者の比率が高いという点に気づく（注 18 参照）。両者のメンバーシップについてはより詳細な考察が必要と思われるが、ドイツ系のプラハ体操協会が上層ミドルクラスを中心とする社交団体ドイツ・カジノと密接な関わりを持っていた点や、体育館の建設にあたってもそのカジノがイニシアティヴを取ったという点を考えると[28]、少なくともプラハ・ソコルよりも相対的に上位に位置するメンバーがドイツ系体操協会に所属していたようである。そうした階層の違いが、ドイツ系とチェコ系への「分化」の分かれ目になった可能性は否定できないであろう。

もう一つの点は、反ユダヤ主義の問題である[29]。これもまた早急に結論を出すことはできないものの、ドイツ系のプラハ体操協会が比較的多数のユダヤ系メンバーを含んでいた[30]ことが「分化」の遠因となったとも考えられよう。例えば、1864 年にライプチヒやベルリンなどからプラハを訪れたドイツ系の体操家は、ソコルにも招待され、チェコ系体操家との「交流」を行っているが、その際、彼らは「プラハ・ドイツ体操協会は半分以上がドイツ人以外のネイション（národ）によって占められている」と指摘したのであった[31]。ソコル側の説明によれば、ゲストとして訪れたドイツ系体操家たちは、ドイツ体操協会よりもむしろ、異なるネイションが含まれていないソコルで体操することを望んだというのである。もちろん、当時における「分化」の原因を反ユダヤ主義に帰すことについては慎重でなければならないが、この点についてより仔細に検討してみる価値はあるだろう。

本章においては、1860 年代におけるドイツ系社会とチェコ系社会の「分化」を体操運動の側面から扱ってきた。ここで指摘できるのは、当時において認識されていたドイツ系とチェコ系の差異が、後に認識されるようになった差異の有り様と異なっていたということであるが、その点について詳しく考察していくには、より綿密な結社研究が必要であろう。特に、体操協会のメンバーシップにその疑問を解く一つの手がかりが隠されているのではないか、という点を示唆することによってこの章の記述を終わることとしたい。

---

[28] *Gedenkschrift* [8], pp.72f.,136-141.

[29] なお、反セム主義（Antisemitismus）という言葉が広く用いられるようになったのは 1880 年代に入ってからであった。その点では、反ユダヤ主義それ自体もまた、1860～70 年代とその後の時期では質的に変化していると考えるべきであろう。長沼宗昭 「反セム主義とシオニズム」歴史学研究会編『強者の論理 ― 帝国主義の時代』(講座世界史 5)、東大出版会、1995 年、202-203 頁。

[30] 1888 年、ドイツ系のプラハ体操協会に所属するフェルキッシュなメンバー64 名が脱退し、プラハ・ドイツ男子体操協会（Deutscher Männerturnverein in Prag）を設立している。ただし、この組織が正式に「アーリア条項」を掲げてユダヤ人の入会を禁止するようになったのは 1897 年のことであった。Rychnovsky [23], pp.62f.

[31] *Památník* [21], p.234.

＜体操運動に関する文献一覧＞

[1] Julius Dolanský, “První počátky Sokola podle zprávy pražského policejního ředitelství,” *Teorie a praxe tělesné výchovy a sportu*, 5 (1957), pp.513-523.

[2] Zora Dvořáková, *Miroslav Tyrš: Prohry a vítězství* (Praha: Olympia, 1989).

[3] Othmar Feyl, “Die Entwicklung des Sokolgründers Heinrich Fügner im Lichte seiner Prager Briefe an den böhmendeutschen Konservativen Joseph Alexander von Helfert in den Jahren 1848 bis 1865: Unveröffentliche deutsche Brief Fügners und ihre Streiflichter zur Sozialgeschichte Böhmens,” in Hans H. Bielfeldt (ed.), *Deutsch-Slawische Wechselseitigkeit in sieben Jahrhunderten* (Berlin, 1956), pp.511-578.

[4] Alois Fikar, *Stručné dějiny sokolstva 1912-1941* (Praha, 1948).

[5] 福田宏「『我が祖国』への想像力 ― ドイツ系多数地域におけるチェコ・ソコルの活動」『スラヴ研究』 49号、2002年、29-50頁。

[6] 福田宏「チェコにおける体操運動とネイション ― ナショナル・シンボルをめぐる闘争」『東欧史研究』 24号、2002年、27-47頁。

[7] 福田宏「ソコルと国民形成 ― チェコスロヴァキアにおける体操運動」有賀郁敏他著『スポーツ』(近代ヨーロッパの探究8)、ミネルヴァ書房、2002年、67-96頁。

[8] *Gedenkschrift des Deutschen Turnvereins in Prag 1862-1887* (Praha, 1887).

[9] Věnceslav Havlíček, “Vliv Darwinovy nauky na Tyrše,” *Tyršův sborník*, 7 (1923), pp.47-67.

[10] Ladislav Jandásek, “The Sokol Movement in Czechoslovakia,” *The Slavonic and East European Review*, 11:31 (1932), pp.65-80.

[11] Ladislav Jandásek, and Jan Pelikán, *Stručné dějiny sokolstva 1862-1912* (Praha, 1946).

[12] Tomáš Jelínek, “Od Sokola k Pionýru: Tělocvičné a skautské hnutí v městské společnosti a jeho sociální úloha,” *Documenta Pragensia*, 18 (2000), pp.315-324.

[13] Přemysl Ježek, *Česká knižní tělovýchovná literatura od první poloviny 19 století až do roku 1918* (Praha: SPN, 1968).

[14] 功刀俊雄「初期ソコル運動の方針をめぐって」『東欧史研究』 7号、1984年、87-106頁。

[15] Vilém Mucha, *K dějinám dělnického tělovýchovného hnutí* (Praha: Orbis, 1953).

[16] Claire E. Nolte, “Every Czech a Sokol!: Feminism and Nationalism in the Czech Sokol Movement,” *Austrian History Yearbook*, 24 (1993), pp.79-100.

[17] Claire E. Nolte, “Choosing Czech Identity in Nineteenth-Century Prague: The Case of Jindřich Fügner,” *Nationalities Papers*, 24:1 (1996), pp. 51-62.

[18] Claire E. Nolte, *The Sokol in the Czech Lands to 1914: Training for the Nation* (New York: Palgrave MacMillan, 2002).

[19] Jan Novotný, “Slavnosti Sokola pražského,” *Documenta Pragensia*, 12 (1995), pp. 223-228.

[20] Věra Olivová, *Lidé a hry: Historická geneze sportu* (Praha: Olympia, 1979).

[21] *Památník vydaný na oslavu dvacetiletého trvání tělocvičné jednoty Sokola pražského* (Praha, 1883).

[22] Antonín Roček, “K filozoficko-psychologickým aspektům formování samostatné české tělovýchovy,” *Sborník Národního muzea v Praze: řada A-Historie*, 39:1/2 (1995), pp.1-35.

[23] Ernst Rychnovsky, *Der Deutsche Turnverein in Prag, 1862-1912* (Praha, 1912).
[24] Josef E. Scheiner, *Sokolstvo* (Praha, 1911).
[25] *Sto deset let Sokola 1862-1972* (Praha: Olympia, 1973).
[26] Miroslav Tyrš, *Hod olympický* (Praha, 1868) [Reprint in *O sokolské idei* (Praha, 1930), vol.1, pp.37-56.] .
[27] Miroslav Tyrš, *Náš úkol, směr a cíl* (Praha, 1871) [Reprint in *O sokolské idei* (Praha, 1930), vol.1, pp.127-138.].
[28] Miroslav Tyrš, *Základové tělocviku* (Praha, 1873, 1926[5]).
[29] Renáta Tyršová, *Jindřich Fügner: paměti a vzpomínky na mého otce* (Praha, 1927), 2 vols.
[30] Renáta Tyršová, *Miroslav Tyrš: jeho osobnost a dílo* (Praha, 1932-1934), 3 vols.
[31] Marek Waic, et al., *Sokol v české společnosti 1862-1938 (Sokol in der tschechischen Gesellschaft)* (Praha: FTVS UK, 1996/97).
[32] *Za praporem sokolským: Posvěceno mužnému duchu čechův* (Praha, 1887).